服飾デザインに見る呪的な問題について

——プリーツ（アコーデオン状）と尾のかかわりを中心として——

今　木　加代子

1　はじめに

紀要第28号において，極北ラップランドに住むスォミ族の背面衣装を通し，古来のシャマンの呪衣に見られる鳥への変身願望，飛翔，飛天の神仙思想が，素材は変化しながらも，現代民族服の中にも伝承されていることを述べてきた。

当稿では尚，中国少数民族ブルーメオ族の実に硬直なプリーツスカートと，インドのラジャスタン地方と見られる，シルクのスカートを比較検討しつつ，古来の民族服に多く見られる，丹念に畳まれたプリーツのアイデア源，その意図を考察する。

2　シャマンの呪衣と鷲みみづくについて

ウノ．ハルヴァは著書「シャマニズム」（ウラルアルタイ系の諸民族の世界像）で[1]，シャマンの呪衣について詳しく述べており，先号でも少々述べて来たが，再度ハルヴァの語を借り考察する。

写真1　ウズベキタン諸民族博物館所蔵の呪衣を参考として[2]

のろ鹿，マラル鹿，あるいは羊の毛皮で作ってあって，明らかに大きな鳥の特徴を表わしている。袖下の縫い合わせに沿って垂れているのは，〈鳥の風切羽〉を表していると民間では説明している。肩から垂れている皮や布の総も又〈つばさ〉と呼ばれていて，そこにふくろうの羽がつけてあることが多い。

これらは死者の国の神秘的な動物と思われる蛇と同様である。又シャマンの腰の回りには金属の飾りと，貝を表した一種の赤い帯が縫いつけてある。

頭は鳥の頭巾と言い鷲みみづくの剝ぎ皮をそのままかぶることもあり，従ってアルタイのシャマンはこの装束をつけた時は，ただちに鳥の姿，それも一羽の鷲みみずくの姿になったのは明らかである。と述べている。

写真2　モンゴルノ呪衣（背面）を参考として[3]

こうした付属品は，さらに帯からと背中からと，ほとんど地面につきそうなほど長く垂れ下がって，上着の下部全体を型づくっている。

極北地方の鳥型の特徴のうち，まず述べておかねばならないのは，袖の縫い目に沿って〈鳥のつばさ〉を表わし，背中に垂れている革条であろう。

写真1
ウズベキタン諸民族博物館所蔵[2)]

写真2
「DIE MONGOLEN」より[3)]

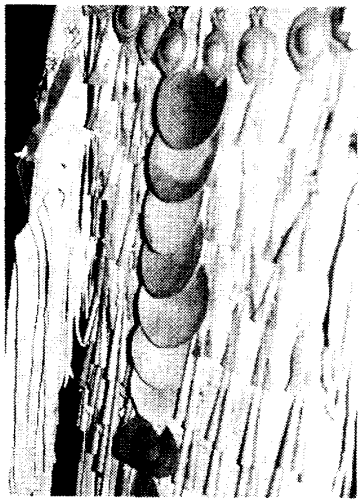


写真3
国立民族学博物館展示
（ヤクートの背面）

写真3　国立民族学博物館所蔵のヤクートの呪衣（背面）を参考として

さらに悪霊を追い払うための色々なものを装束につけている。装束の袖や背中につけた鈴やがらがらがそうである。

右の袖には普通五個，左には四個つける。背中には二列あるいは三列に並べてつける。さらに背中の小さな筒状の付属物と一緒についた環は音を発して諸霊を退散させる。

その他背中には小さな金属製の弓矢を九個一列に並べてあるのさえ見られる。これらは明らかに悪霊を追い払うための道具であって，やはりシャマンの背中に一列に並べてつけてある小さな貝（ユラン，バス）〈蛇の頭〉もまたこの目的に役立つものであろう。ときに条の下端にも貝をぶらさげることがある。

シャマンはその行為を行っている間，鳥の，もっと具体的に言えば鷲みみずくの服を着なければならないという観念を共通にもっている[1)]。とあり鷲みみずくがシャマンの呪衣のデザイン源であることが述べられている。

写真4　アメリカワシミミズクを参考として

ルネ．ゲノンの表現を用いれば，鷲が直感的認識を表すのに対して，梟は理性的認識を表す鳥である。事実，鷲は太陽の光を直接，何の覆いもなく受け取るのに対して，夜の鳥である梟は月の光をうける。つまり月によって一度反射された太陽光線をうける。だから知性の面でも，反省〔フランス語では「反射」と同じ relflexion〕を表すのである。そればかりか，夜の闇を見通す眼を持っている点で，隠された物や不可見のものに関する知恵を具現することにもなる。――[4)]とあり，

わが国の北海道アイヌの伝説にも，縞梟に変わるが，人も動物も共々生活の糧とする川の鮭を，他の動物に先取りされぬよう，縞梟は夜も眼を光らせて見守り，人の食べる分を残してくれた，との事から神霊化され，様々なデザインにアレンジされ登場している[5)]

写真4　又この梟は大きく羽ばたくとその尾に，羽に，くっきりと縞模様が表われる。

この事は多くの民族服に見られる模様のアイデア源と考えられ，特に縫製，模様に留意しつつ，

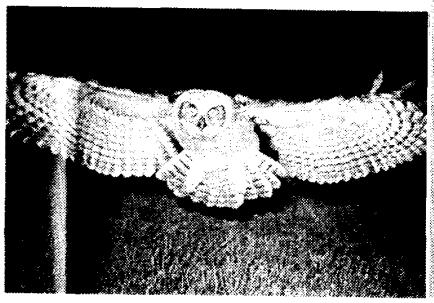


写真4
「動物百科8鳥類Ⅱ」
平凡社より

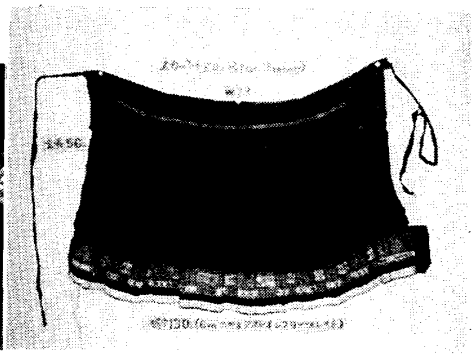


写真5
Meo のスカート（著者蔵）

写真6
「Peoples of the Golden Triangle」
より[7]

以下2地方の民族服の下半身のデザインを考察する。

3　Blue Hmong (Meo) のスカートについて

モン族（Hmong）は，メオ族（Meo）中国の「苗」に由来する。古くは中国の中．南部に広く分布していたが，諸民族の圧迫を受けて次第に南下し，インドシナ半島へも進出したのである。モン族は病気になったり，死んだり，不吉な事がおこるということは，精霊の気まぐれの餌食になったのだとしている。

このような状態に遭遇すると，モン族はすぐにシャマンを呼んだ。シャマンは，エクスタシー（恍惚）状態になって，精霊の世界に“旅”をする。そして，災いをもたらした悪意を持つ精霊に動物を供犠し，なだめようとするのである。

モン族のあいだでは，あらゆる自然物，人為的災害は同じようにみなされおり，すべて宇宙論的に位置づけられ，シャマンによって解決されるとされた。――[6]

このシャマニズム的思想の具現の形と見られる Blue Meo のプリーツスカートのデザイン的意図を考察してみる。

写真5　何よりも先ずこのスカートの着装法が特徴で，この細かいプリーツは後ろに当てがい前で紐を結ぶ。その開いたところに細長い前だれをつけ，写真6その前垂れの紐の先には房がついており，祭りの時など子供は特に大きく華やかな房を背に結ぶ。

又写真7　これは子供の死後，葬送時の被せ方で，このスカートを尾として被せ，クロスステッチの小布が縫い合わされた上衣を鳥の羽として被せる。当地では死体を〈鶏の羽〉に抱かれた姿で埋葬される。――[7]とあり，はっきりとこのスカートは〈鶏の尾〉を示したものとなっている。男子服には雄鳥の鶏冠の装飾も伺われ，写真6の前垂れの紐先の房も〈鶏の尾〉のアレンジと見られる。

写真７
「Peoples of the Golden Triangle」より[7]

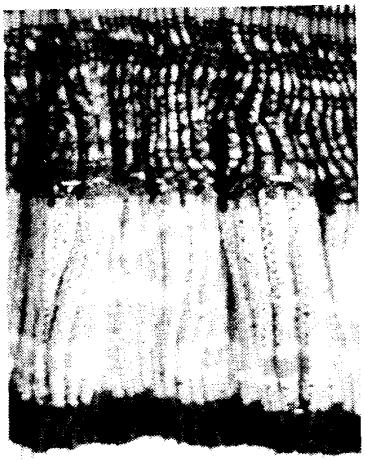


写真８
Meo のスカート下部

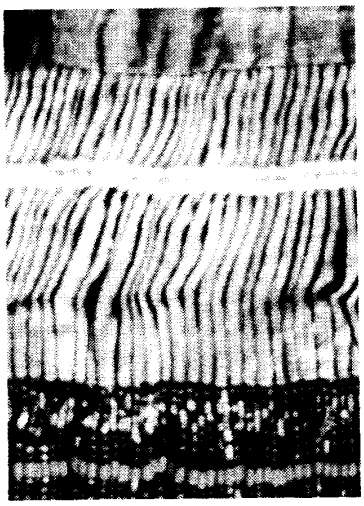
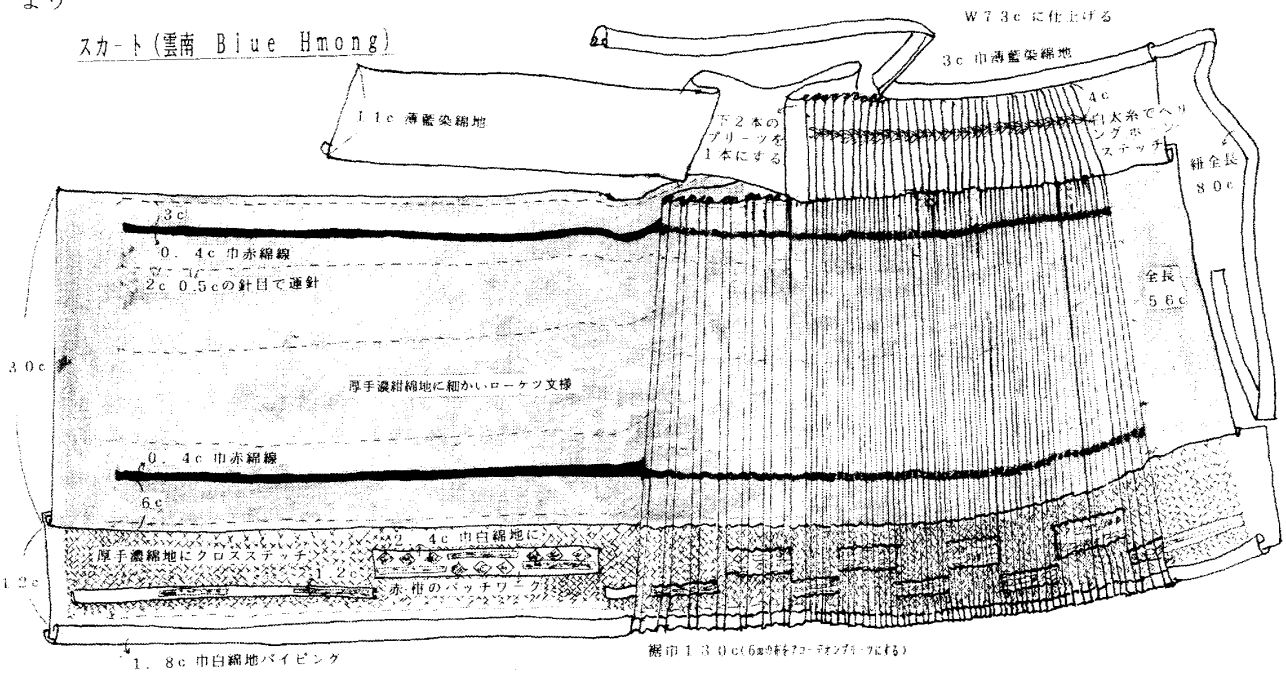


写真９
Meo のスカート上部



図Ⅰ

図１　その縫製を見ると，７ｍ前後の厚手木綿を２cm進み５mmすくう運針で130cmに迄絞り込んだ実に細かいプリーツとなる。絞る前には裾端に1.8cm巾の白の厚手綿地のパイピングが施されるが，この布は常識以上の厚いもので，勢いよい尾羽を表現するためのテクニックト見られる。

写真８　その上12cmの間は幾何学模様のクロスステッチでうめつくされ，尚その上に製図にも記す実に小さな布のパッチワークが施されている。その上30cmは，厚手木綿に細かい幾何学模様の濃い藍のローケツ染めが一面に施され，その上に４mm巾の赤い横線が２本鋭くパッチワークされている。

これら当地特有の繊細な技法で施されている横縞模様は，写真４にも似た，鳥が羽ばたくと現われる様々な模様をアレンヂしたものと考察され，模様の細かさは，鳥の羽毛一本一本をイメージする貴重なものと解釈される。

スカート(INDIA)

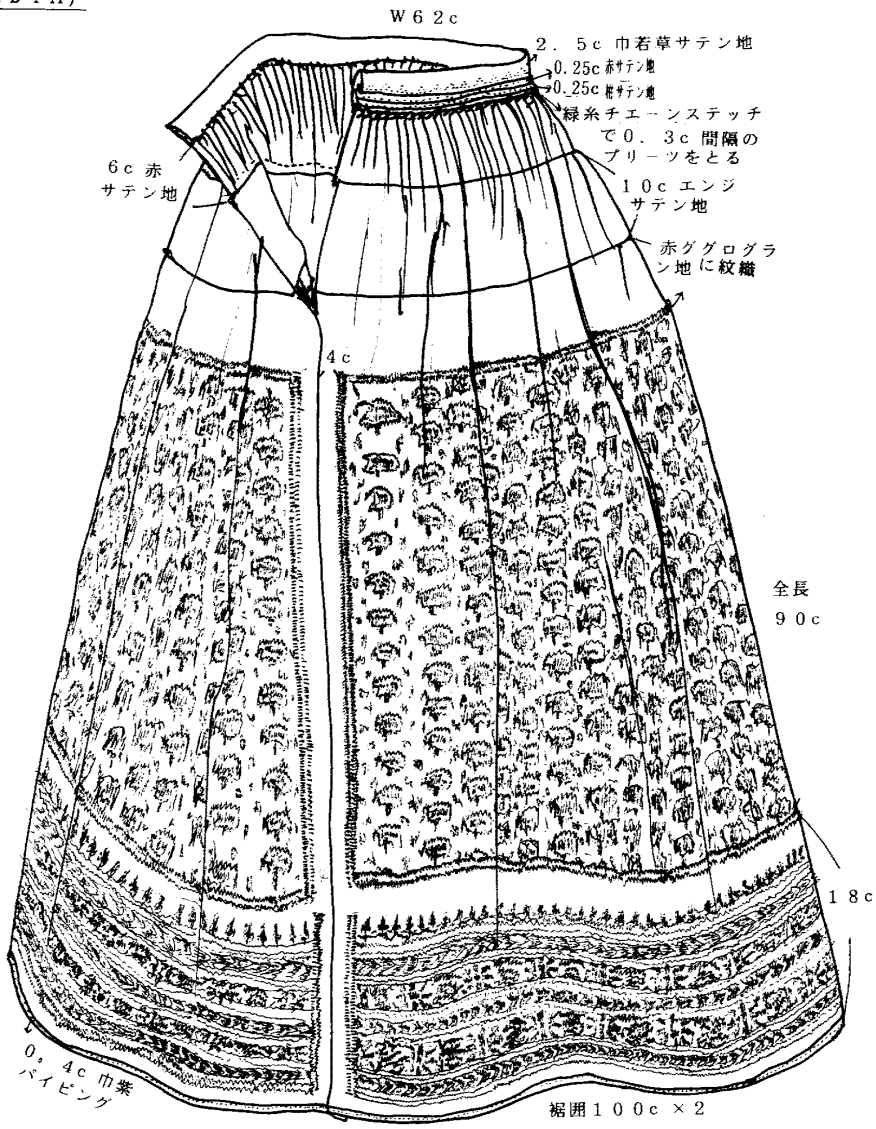


図2

写真9　最上段ウエスト部は11cm巾の薄い木綿地に代わり，下2本のプリーツを一本に取りながら継ぎ合わせ，太い白糸のヘリングボーンステッチで止められ，3cm巾の紐がついている。

4　India のスカートについて

インドの商品を扱う店より買い求めたもので，正確な民族は不明であるが，ラジャスタン地方のものと思われるスカートを考察してみる。

写真10　図2　形態は筒型となるが，Meo とも共通する横縞の切り換えがある。

裾端は4mm巾の紫の薄い絹地のパイピング，その上18cmは草，花，太陽を思わせる高度な技法の赤地に若草色の紋織，その上56cmは赤グログラン地に白の小さな木の並ぶ紋織となっている。この高度な技法で施される横縞模様は，先の Meo の細かいローケツ染め，クロスステッチ，パッチワークと当地特有の凝った技法で施される横縞模様と，その観念には相通づるものがある。尚その上，10cm，6cmと二段に切り換えられながらエンジの絹サテン地に変わる。

写真10
India のスカート（著者蔵）

写真11
India のスカート上部

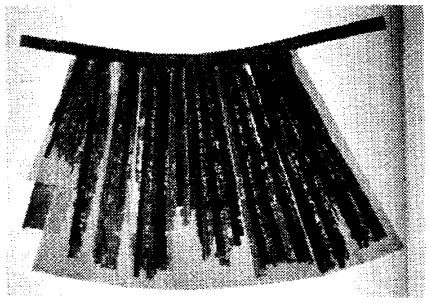


写真12
1992年正倉院展図録より

写真11　そのウエスト部の始末は，3㎜巾の細かいプリーツを畳みつつ緑色の糸で，Meo とも似たチエーンステッチで止められている。
その上は2.5㎜巾の赤と柑で二本，二つ折のサテン地が細かい平縫いで縫いつけられており，これを2.5㎝巾に若草色の絹サテン地ではさみ，62㎝のベルトとなっている。

5　類似のスカートについて

以上二点のスカートは，筒形とエプロン形と形の上で，絹と綿と素材の上での変化を見ても，以下の共通点が見られる。

1　丹念に細かく畳まれたプリーツを，ヘリングボーン，ステッチでとめていること。
2　上部は実用的な薄地に切り変わり，再生を考えていること。
3　下部は繊細で凝った技法の，横縞模様の布に切り変わること。
4　裾端はパイピングで始末されること。

アジアの西と東と距離を分けても，二点のスカートの縫製には，上記の共通の流れが伺われる。

先号で記すスォミ族の衣装もワンピースながらも，腰に絞めたベルトの下は細いプリーツ状であり，その裾のフリルに，草花模様の細いテープを常識以上に重ね重ねて，実に重厚で華麗な横縞模様が施され，尾羽のイメージが誇張表現されている。[8)]

又松本敏子先生収集の民族服，ハンガリー．バローツ地方のスカートも，Meo と同じ様式であることが記されている。[9)]

写真12　昨1992年の正倉院展に展示された裳（女性用の巻スカートのようなもの）「紫綾臈纈絁継分裳」も当 Meo と同じ巻スカートの様式であり，細いローケツ模様が確認される。ただ当裳では細いテープ状の裂き布がつながり，当考察のプリーツに通じる〈尾羽〉のイメージが表現されていると見られ，やがて二千年に及ぼうとする「裳」を前に，悠久の時を忘れ，非常な感銘であった。

6 まとめ

以上2点のプリーツを考察して来たが，その形態，素材等には各様の変化を見ても，丹念に畳まれるプリーツは同じ技法で，それらにはさほどの機能性も見られず，ただ古来のシャマンの，人が鳥の如くに天高い飛翔を請い願い，鳥の仮装ともなる，呪衣の裾〈尾羽〉のイメージを継承するものと思われ，往年の神仙思想が多分に秘められたデザインと考察される。
又，丹念に横縞を描きつつ施されるローケツ，クロスステッチ，パッチワーク，高度な技法の紋織等も，鳥が羽ばたくと鮮やかに現れる様々な模様（写真4参照）の具現化と見られ，羽毛一本一本を丹念に刺すが如きテクニックと考察され，又それらは，尾羽の持つ生気，或いは，草木の芽吹く息吹きの如きイメージの，具現の技法とも解釈される。

各地各様に表現される下半身，裾のデザインは，当地を象徴する技法の集積とも思われ，いづれ列挙してみることも一課題と考えている。

注

1）ウノ．ハルヴァ著　田中克彦訳「シャマニズム」（アルタイ系諸民族の世界像）三省堂
2）1980年「草原のシルクロード展」京都ＫＢＳホール図録より
3）Pinguin-Verlag,「DIE MONGOLEN」Innsbruck Umschau-Verlag, Frankfurt/Main
4）ジャン＝ポール，クレベール著　竹内信夫・柳谷巌・西村哲一・瀬戸直彦／アランロシェ訳「動物シンボル事典」大修館書店
5）文　更科源蔵　写真　掛川源一朗「アイヌの神話」講談社
6）「世界人類百科」（人間，その生活と習俗―モン族―）日本メールオーダー
7）**Paul and Elaine Lewis**「Peoples of the Golden Triangle」Six Tribes in Thailand. Thames and Hudson Printedin west Germany
8）今木加代子「服飾デザインに見る呪的な問題について―スオミ族の頭装，背面意匠を中心として―」帝塚山短期大学紀要第28号
9）松本敏子「世界の民族服」⑯ハンガリー．バローツ地方のスカート「衣生活研究」6月号　1992年　関西衣生活研究